

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02740

研究課題名（和文）自然観を構築させる芸術の6層の検証 言語/造形によるメディアエ ショーン

研究課題名（英文）Processing and Mediating the Construction of Perspectives on Nature in 6 layers of Art through Language and Plastic arts.

研究代表者

磯部 錦司 (Isobe, Kinji)

椋山女学園大学・教育学部・教授

研究者番号：40322614

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、自然観を核となる「知」と位置づけ、「自然・生命」の視点から「芸術の6層」を<言語/造形>を媒介として検証することを目的とした一連の研究である。自然観・生命観に基づく「美術による教育」の構築を目指し、タンザニア（アフリカ）と日本の小学校で「生命（Inochi）のイメージ」をテーマとしたワークショップと鑑賞活動を実施した。そのアフリカの絵画の鑑賞活動を基に、日本の子どもたちが造形と言葉を用いて解釈した「いのち」の意味について分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の課題は、「知としての自然観の構築」の検証である。その検証によって明らかにする教育的効果は、カリキュラムの拡充だけでなく、学校教育における美術教育の担う役割をより確かにするものとして期待できる。また、本研究が扱う自然観は、現代日本の生命哲学をもとにした、日本文化的、状況的、包括的、関係的な特徴をもち、その教育内容は、世界共通の課題に対応した視点を持つ。研究手法は、造形活動のプロセスと造形要素、及び対象者の言語化された記録を活用し、造形と言語による融合的、統合的、相互的な質的分析において諸言語と造形に生まれる齟齬を表面化させ対象者が形成する自然や生命に対する意味を客観化するものである。

研究成果の概要（英文）：This research is a series of studies that positioned the view of nature as the core "Intelligence," and aimed to examine the "six layers of art" from the viewpoint of "nature/life" through the medium of <language/art>. Aiming to construct "education through art" based on the view of nature and life, workshops and appreciation activities on the theme of "images of life (Inochi)" were conducted in elementary schools in Tanzania (Africa) and Japan. Based on the viewing activities of those African paintings, we analyzed the meaning of "Inochi" as interpreted by Japanese children using plastic arts and words.

研究分野：美術科教育

キーワード：芸術 自然観 生命観 造形表現 図画工作 芸術の6層 メディアエ ショーン 鑑賞

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本実践は、「芸術の6層」(磯部,2020)の実相と教育における知の構造を、言語と造形から検証することを目的にした一連の研究である。「芸術の6層」とは、J.デューイ(J.Dewey)の芸術論における芸術の働きと現代日本の生命論を基盤に、芸術を、A層「環境との一体化」、B層「個の想像的世界の形象化」、C層「環境の芸術化」、D層「生活の芸術化」、E層「社会的イメージの形象化」、F層「社会的創造活動の芸術化」の6層から示したものである。しかし、芸術において形成される意味は多岐に渡り、検証のために各国・地域において言語化された表現の意味は必ずしも深層において共通の意味を持たず、言語と造形の融合的な解釈による分析が必要であることが課題として残された。6層をとおして生成される個々の意味は、個人の生活背景や文化、経験に裏付けされたものであり、より統合的、相互的な分析が求められた。本研究では、これまでの日本各地及び諸外国の学校、施設の協力によって得た実践記録と、新たな日本とアフリカでの実践を基に、6層の活動のプロセスと作品、言語化されたインタビュー及びポートフォリオ、事後の記述を用い、諸言語と造形に生まれる齟齬を表面化させ、融合的、統合的な解釈(メデュエ ション)から、芸術の6層において生成される意味を、生命(いのち)観をとおし明らかにしていく。

2. 研究の目的

本研究では、日本とアフリカでの実践を基に、作品及び言語化された記録を用い、諸言語と造形に生まれる齟齬を表面化させ、融合的、統合的な解釈(メデュエ ション)から「生命(いのち)のイメージ」の表現内容の検討を行い、「自然観を構築させる芸術の6層」において生成される「生命(いのち)観」について示す。

3. 研究の方法

メデュエ ションは、言語、医療、司法等の領域において活用され、双方に生まれる意味の解釈の齟齬を表面化し、融合的、統合的、相互的に意味づけていく手法である。「アート・メデュエ ション」とは、その考えを芸術の意味解釈に援用した本研究における造語である。本研究では、プロセスの記録、制作者へのインタビュー、制作者のポートフォリオ、作品についての事後の記述から形成された意味について分析する。本研究では、日本とアフリカでの新たな実践を対象に行う。

(1) 対象児

L Primary School (タンザニア, トゥリアニ)

・小学2年生~7年生(174名), 2020年2月25日, 26日

R Primary School (タンザニア, ザンジバル)

・小学3年生~5年生(35名), 2020年2月27日

K 小学校(日本)

・小学2年生(175名), 2020年11月25日, 27日

○S 小学校

・小学5年生(25名), 2022年9月14日

(2) 実践記録及び作品の収集

両国において、紙、クレヨン(日本製16色市販)を用い各自が絵画で制作し、自分の作品の内容を言語化する。日本語をスワヒリ語に通訳し、制作の主旨とテーマ、方法について説明を行った。まず、「生命(いのち)」(“Uhai”)からどんなことを想像するのか言語で発表した。次に、紙とクレヨンを配布し、その言葉のイメージを色と形で表現した。完成後、自分の作品について、ワークシートに記述し、その内容を言葉で発表した。

アフリカの実践では、日本文化の紹介を兼ねて、和紙の原料を用い和紙をつくり、その和紙と身の周りの自然物を用いてワークショップを行い、その活動後に、「生命(いのち)のイメージ」を主題に各自が絵画で制作した。最初に「生命(いのち)」(“Uhai”)からどんなことを想像するのか言語(スワヒリ語)で発表した。制作後、自分の作品の内容をワークシートにスワヒリ語において言語化した。実践は笹瀬、磯部のTTで行い、言語化はイミックがワークシートを用い行った。スワヒリ語は笹瀬、現地教員が担当し、英語はイミックが担当した。記録は、プロセスの映像と作品、ワークシートにおいて収集を行った。

日本での実践は、アフリカとの交流活動として、総合的な学習活動における異文化間教育、いのちの教育の一環として行い、図画工作科の授業が横断的に関わった。日本とアフリカの作品を比較しながら鑑賞が行えるよう同テーマでの絵画制作を先に設定し、次に、「生命(いのち)のイメージ」を用い鑑賞活動を行った。鑑賞活動では、アフリカの子どもの背景や生活を理解させるために、笹瀬がタンザニアで担任時に記録した生活、文化、環境に関わる映像を構成し活用した。記録は、作品及び実践のプロセスは映像で行い、作品についての説明は、ワークシートを用い記述で収集した。尚、笹瀬は2月のタンザニアでの実践と、その後の11月の日本での実践の両地において担任教員として携わった。

(3) 分析の方法

記録は、実践のプロセスの映像と作品、ワークシートを用いた。言語間の分析はイミックが、造形、プロセスの関係は磯部が分担し、対象者が形成する意味の解釈を行った。

まず、異文化間において表現された作品の造形からイメージを言語化する場面に着目した。日本の子どもたちがまず自分の「生命(いのち)のイメージ」を造形と言語で表現した後、アフリカの子どもたちが描いた作品について鑑賞活動を行い、そこに形成される「生命(いのち)のイメージ」について、記述記録から分析を行った。鑑賞活動において対象とした作品の選択は、最も多く描かれている太陽、木、草花を中心にモチーフ及び色使いに特徴が見られる作品を選択した。日本の子どもたちの「生命(いのち)のイメージ」の表現内容については、前研究(2017)¹⁾において同小学校の2年生、6年生を対象に分類した下記の4群を基に考察した。

- ・a群:「具体的な自然の事物や風景」
- ・b群:「生命に対する気持ちや感情」
- ・c群:「状況や関係性」
- ・d群:「生命力への共感」

a群~d群の視点を基にしなが、共通点と相違点を考慮し、アフリカの子どもたちの造形表現から言語化された「生命(いのち)のイメージ」について検討した。記述分析は、子どもたちが自分の感じ方の根拠としている造形要素を各作品について明らかにし、そこに生まれるイメージについて抽出し、4群を中心に整理し、日本の子どもたちの作品に見られるイメージの共通点と相違点からイメージの深まりを示した。

4. 研究成果

(1) <言語/造形>による「生命(いのち)のイメージ」の表現

アフリカでの実践は、日本語をスワヒリ語に通訳し、制作の主旨とテーマ、方法について説明を行った。まず、「生命(いのち)」(“Uhai”)からどんなことを想像するのか言語で発表した。そのモチーフは、太陽、花、木、実、動物などの自然物と自然の風景、人間、家などの生活環境にあるものが使われ、その内容は、「太陽や草花や木の自然そのものが描かれた内容」、「自然物と人間を組み合わせるその関係を表した内容」、「人間の生や誕生を表した内容」に特徴が見られた。

日本での実践も同様の展開において実践した。日本の作品の特徴は、アフリカに比べ花や木や動物などは少ないが、モチーフとして扱われる対象は類似している。ただ、描かれる自然の内容や色はアフリカと日本では明らかに違いが見られた。表現内容は、「視覚的な自然そのものを表現している内容」、「あたたかさや優しさ大切さ等、思いや願いが表現されている内容」、「つながりや広がり、循環などの関係性を表現している内容」、「生命の誕生や出来事、生命力等が現象として表現されている内容」に大別できる。

(2) <言語/造形>によるアート・メディエーション

鑑賞のプロセス

日本の実践では、「生命(いのち)のイメージ」の制作を経て、アフリカの子どもたちが同テーマで描いた作品を用い、次のA~Cの段階から鑑賞活動を行った。

導入となるAの段階では、自分の主観から感じたことを語り、感じ方を共有した。その発言をもとに、Bの段階では、感じたことの根拠を造形要素から見つけ、その根拠をもとに感じたことを語らせた。これらの段階では、自分なりの感じ方を大切に鑑賞させた。次のCの段階では、アフリカで現地の子どもの担任教諭であった笹瀬が、アフリカの日常において記録していた子どもたちの活動の様子や生活、環境の映像を本授業用に構成し子どもたちに見せた。ここで子どもたちは、アフリカの衣服、住まい、食事、文化に触れることによって作品の背景の違いを知ることとなる。さらに、子どもたちは、その映像から作者の背景(生活、文化、環境)とつながら作品を鑑賞した。そのCの段階では、「自分の表現との相違点」に目を向けさせ、再度、自分たちの表現とつながら鑑賞した。

子どもたちによるアート・メディエーション

子どもの発言に見られるA、B、Cの段階は、必ずしも順序だったものではなく、導入部分のA段階においても、根拠を示しながら自分たちの背景と比較した発言は見られる。Aの段階では、自分なりの直観的で感覚的な感じ方によって、感じたことが言語化され、感じ方が共有されていた。自分の主観をもとに感じたことを語る段階では、「楽しそうな感じ、あたたかい感じ」等の発言に見られるように、感覚的な感じ方や感情が語られる内容と、「光っている感じ、自然がいっぱい、お花がいっぱい、キリンがお日様を浴びている、ひまわりみたいなお花がある」等、視覚的な状況から解釈がされている内容に特徴が見られる。しかし、自分なりの主観的な感じ方は、Aの段階だけでなく全ての鑑賞のプロセスの基盤となっている。Bの段階では、実践者の「どんなところからそう思う」という問いに対して、「くるくるしていて楽しそう、虹色の木があつてにぎやか、花がゆれているみたいで色がいっぱいあってきれい、草原が広がっていてきれい」等の発言に見られるように、根拠となる造形要素(色、形、モチーフ、線質、構図等)と結びつけながら解釈を深めている。

そして、Cの段階においてアフリカの生活や文化、環境を映像から知ることによって発言は多様化し、自分の側の主観的な解釈から、作者の背景を結びつけた解釈へと広がっている。Cの段階では、映像をとおして背景にある生活や文化について知ることを経て、再度、アフリカの子

もたちの作品に戻って鑑賞することになる。この過程では、「色が違う。自分のはカラフルじゃない」「みんな変わってる。みんな違う」「虫みたいなのがたくさん描いてある」「木が歩いているみたいに見えるんな色がある」「黒い木に太陽がさして焼けている感じ。太陽の光が明るくなっている」「奥に小さい太陽があっような花がある。にぎやか」等、子どもたちは、自分の表現との相違点を見つけその特徴を示している。

さらに、A~Cの段階の中で、アフリカの絵画の特徴を表す記述に着目してみると、その特徴の一つは、「光っている、色が違う、カラフル、色がいっぱい」等に見られる「色彩」への着目である。もう一つは、「いろんな花」「自然がいっぱい」「お花がいっぱい」「自然が浮かんでくる」「虫がたくさん」「黒い木に太陽」「太陽の光が明るい」等、視覚的に描かれている「モチーフやその描かれ方」に特徴が見られる。特に、「自然の表現の豊かさ」につながる多様な生きものや植物の表現、太陽の存在とその表現に特徴を見つけている。この豊かな色彩や豊かな自然の表現に見られる造形的な要素が、結果として「楽しそう」「にぎやか」「あたたかい」といった主観的な感じ方の根拠として語られている。さらに、「キリンがおひさまをあびている」「花が踊っている」「木が歩いている」等、子どもたちは、絵画の中に「自分の物語」を生成しながら、自分なりの感じ方を深めている。

(3) まとめの考察

本研究の目的は、造形と言語を用いて「生命(いのち)」を主題にその意味やイメージの解釈を明らかにしていこうとするものであった。その実践事例となるアフリカでの本実践は、表現と生活や環境や文化との関係に特徴が見られた。一つは色彩である。その内容は、日本の子どもたちの鑑賞活動の中でも、光や多様な色の感じ方において言語化されている。もう一つはモチーフとその描かれ方である。共通するところは、自然物や風景、人間の生活環境にあるものが視覚対象として用いられているが、アフリカの絵画では、太陽の表現や自然の色彩表現に日本の子どもたちには見られない特徴がある。この豊かな色彩や豊かな自然の表現に見られる造形的な要素が、「楽しそう、にぎやか、あたたかい」といった印象の根拠として語られている。

まず、多様な色彩表現から日本とはちがう感じ方を子どもたちは見つけ出している。色が固有色や視覚的な概念にとらわれない色で表現されていることに違いを見つけ、豊かさや鮮やかさ、優しさやにぎやかさを造形から意味づけている。

さらに、描かれているモチーフや線や形に着目してみると、子どもたちはその違いから解釈を深めている。自然の事物そのものをおして生命のイメージを表現している作品が多いが、描かれている具体的な自然の事物やその環境そのものに違いが見られる。アフリカの作品は、日本と異なり抽象的、幾何学的な図形や文様で表す作品は皆無であり、すべての作品が自然の事物をおしてイメージを表現している。しかし、写実的、視覚的に生命のイメージを表現している作品(a群)は日本に比べ少なく、「日本にはない花の色」「見た色と違う色」「見える色ではなく感じた色」と日本の子どもたちの記述に見られるように、固定概念に縛られない色での表現や写実的、視覚的な色彩に支配されない色使いに日本の子どもたちは違いを見つけている。

モチーフにおいて特に特徴的なものが太陽である。アフリカの表現は日本に比べ太陽の存在が大きい。太陽そのものを生命の象徴として表現されることにより、「優しさや明るさといった感情や気持ち(b群)」、「力強さ等の生命力への共感(d群)」を見る側にあたえている。さらにその表現は、眩しさや明るさといった「状況や、包み込む、支えるといった関係性(c群)」から生命のイメージが捉えられている。

アフリカの表現内容において特に着目したいのは「状況や関係」(c群)の表現である。日本の子どもたちは「つながり、支える、つつむ」等といったイメージを、自然物相互や自然と人間相互の関係において言語化している。先の研究や本対象児が事前に描いた日本の表現においても一部でその内容は見られたが、アフリカの作品の鑑賞活動の過程において、多くの子どもがその視点からイメージを意味づけているところに特徴が見られる。

また、「現実/新たな世界」、「善/悪」、「昼/夜」、「光/影」といった対の概念において生命を解釈しようとする見方は、日本の子どもたちの作品の中にも稀に「生/死」、「喜び/悲しみ」等の表現において確認されているが、アフリカの絵画の鑑賞活動においては、その見方が多くの子どもたちにおいて言語化されている。また、日本の子どもたちの表現では、「生命力への共感(d群)」を表す作品は少なかったが、アフリカの絵画の鑑賞活動をおし、言語においてそのイメージは深まっている。

授業後の記述では、「色彩の豊かさや色使い」、「ものの捉え方、見方、描き方」の違いに気づきながら、共通点として、「考えていること、伝えたいことは同じである」と子どもたちは捉えている。環境や経験、文化的背景から表現の違いを見つけながら、「生命(いのち)」への見方や感じ方、考え方に共通点があることを子どもたちは見つけ出し、自分の「生命(いのち)のイメージ」を深めている。

「生命(いのち)のイメージ」をおしアート・メディエーションによって自然観を知として構築させるその実践の意味付けとプロセスの分析については、今後の検討としたい。

注

(1) 磯部錦司『『芸術の6層』による教育 - <自然/生命>を軸とした知の構造 -』ななみ書房、2020年、pp.297-301.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 磯部錦司, イミック アレクサンダー, 笹瀬綾香 | 4. 巻 16 |
| 2. 論文標題 <自然/生命>を視点とした<言語/造形>によるアート・メディエーション アフリカ(タンザニア)における生命(いのち)のイメージの解釈 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 椋山女学園大学教育学部紀要 | 6. 最初と最後の頁 175-180 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 イミック アレクサンダー, 磯部錦司, 笹瀬綾香 | 4. 巻 16 |
| 2. 論文標題 Art mediation through <language/drawing> from the perspective of nature: Observation of education/language/art as "image of life" in Tanzania | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 椋山女学園大学教育学部紀要 | 6. 最初と最後の頁 181-184 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 磯部錦司 イミック アレクサンダー 笹瀬綾香 | 4. 巻 14 |
| 2. 論文標題 自然観を視点とした 言語/造形 によるアート・メディエーション-事例アフリカ(タンザニア)- | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 椋山女学園大学教育学部紀要 | 6. 最初と最後の頁 257 ~ 264 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 Alexander Imig |
| 2. 発表標題 Vom Wunsch zum Portfolio |
| 3. 学会等名 XIV. Kongress der Internationalen Vereinigung für Germanistik (IVG) (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------|--|------------------------------------|----|
| 研究 分担 者 | Imig Alexander (Imig Alexander) (50511143) | 中京大学・国際教養学部・准教授 (33908) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|